

実践記録

「民俗学の教材化」を考える

～伝説・俗信を検証する授業から～

千葉県立東葛飾高等学校

小関 勇次

民俗学の有用性

高校生というのはどうしてこんなにオバケ屋敷が好きなのだろうか？文化祭が近づくといつもこう思う。幽霊やオバケはもちろんのこと、占いや超能力を信じ、自分の信仰する宗教もわからないままカルト教団に関心を持つ生徒もいる。これは「信じる」という行為で連帯感を持つ青年期特有の傾向であると思われる。教師としては、授業を通じこれらの魍魎魍魎を検証してやれと思っていた。

このような青年期特有の思想・行動を打破するためには、各人の信じる魍魎魍魎を自ら検証させることが必要である。そこで民俗学をテーマとした伝説や俗信の検証授業を試みるようになった。

民俗学は地域の生活文化と密接に関連し、過去の生活環境を知る上で貴重な手がかりとなる。

また、過去から現在に継承される価値の高い道徳律を含むものである。このような観点から歴史教育や公民教育にも有用であり、民俗学と社会科教育を統合した学習プログラムを開発したいと考えようになった。例えば、日本史では「文化史」や「差別問題」で取り入れ、世界史では「比較文明的視点」で展開できるし、地理でも「生活・文化」に関連させられる。また、現代社会では「伝統行事や宗教」などの単元に関連がある。

こうして授業の中で導入することと、総合学習でも民俗学を取り入れた。民俗学の講座を設けて、日本の伝説や俗信を検証する課題を設定した。

生徒の伝説や俗信のテーマは自由で、例えば、鬼、天狗、河童、道祖神、七福神、年中行事、祭り、桃太郎、シーサー、来訪神、柳田國男研究などさまざまである。例えば、「河童」をテーマとしてその正体を明かそうとすると、中国の水虎伝説、遠野をはじめ日本各地のカッパ伝説、あるいは絶滅種のニホンカワウソにたどりつく。調べる過程では民俗学者の柳田國男を知り、文学では玄奘や芥川龍之介を知り、葛飾北斎や水木しげるの漫画で描かれた河童を知ることになる。

こうして考えると、「河童」を調べることで、「文学」・「生物学」・「歴史学」・「民俗学」と発展し、そ



ユーラシアカワウソ



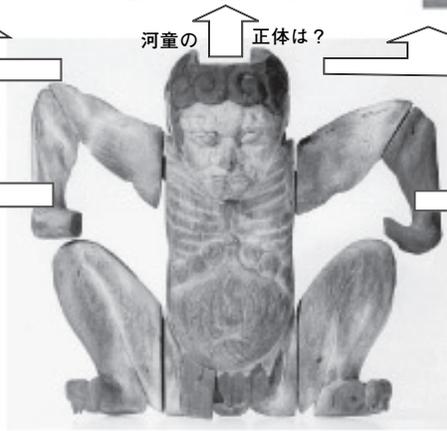
玄奘の行程図 (沙悟浄)



「水虎晚歸之図」芥川龍之介



水虎(河童)の図 江戸時代



「北面天満神社河童像」歴史民俗博物館



「葛飾北斎」漫画の河童

図1 「河童検証」の知的副産物

の知的副産物は大きい。(図1)

民俗学を学ぶカリキュラム

民俗学は、地歴科の領域に関連する内容が多い。しかし、学校では専門的な文献や資料について不足することはいぬめない。そこで、博学連携を実施したいと考える。ところが、通常の授業では博学は難しい。また、単発的な博学では単なる校外学習である。年間を通した授業でなければ知識として定着しない。そこで本校は、総合学習でこれを実施し、継続的な博学を実施することとした。総合学習は高校で、週1時間1単位の必修教科目である。本校では総合学習を「自由研究」と呼んで、1970年以來ずっと実施している。「自由研究」は講座制で、歴史学・地理学・民俗学などを地歴公民科で担当している。

さらに、千葉県より「進学指導重点校」の指定を受けたことにより、大学や博物館などと連携し、外部講師による高等学校の教科・科目の枠組みを超えた授業を展開できるようになった。このようなカリキュラムを本校では「リベラルアーツ講座」といい、地歴公民科では「民俗学」という講座を設定して、長期休業期間を利用して国立歴史民俗博物館で課外授業及び見学会を実施している。これによって「民俗学」の領域における博物館での最先端の研究を紹介していただき、「学問に対する知的好奇心を高め、高等教育に対応できる教養を身につけることで生徒の学習意欲を喚起させる」ことを目標として実施するようになった。このようなことが評価され、国立歴史民俗博物館より博学連携研究の指定を受けるまでになった。振り返ってみると、「博学は教師が動かなければ実現しない」ということであり、また、「研究指定があればやる」というような受け身的な取り組みでも続かない。教師自らが、旺盛な探求心を持っていなければ実現できない。

民俗学の教材化（時間と空間で捉える民俗学）

国立歴史民俗博物館との授業実践は圧倒的に歴史的分野が多い。そのため民俗学を歴史からアプローチする事例は多く、地理の領域から教育の場で導入・活用した事例が少ない。しかし、空間をとおしてものを考えたり、地図を使って表現したり考察することが得意な地理教師が「地理的な見方や考え方」を用いて民俗学を教材化したらどうなるか。以下、シーサーをテーマとした地理教師(筆者)の教材

を紹介するが、民俗学の考え方は、歴史と地理を統合した「時間・空間的な見方や考え方」が必要である。(地理教師が教材化した民俗学の事例)

本校の修学旅行は沖縄である。

T:「シーサー」を指して、「あれは何か?」「どんな意味があるのか?」と質問(写真1)

S:多くは「シーサー」と答え、数人は「屋根にとまっているから守り神」と答える。その後、「神社の狛犬に似ている」「獅子にも似ている」「雄か雌か」「どこから来たのか」「どんな意味があるのか」と盛り上がる。

T:「それでは、気に入ったシーサーの写真を撮り、正体を調べるように」と課題を出す。

民俗学の入り口は、日常の「あれっ、これはなんだろう」という疑問を持つことから始まる。それは十分教材としての価値を持っている。民俗学を教材化するコツは、「歴史的な見方や考え方」の5W1Hと「なぜ、ここに、このようなモノ(事象)が存在するのか」という「地理的な見方や考え方」の両面が必要である。この「地理的な見方や考え方」は地理を学んでいないと難しいと思われるので、わかりやすく、「地図をとおして見たり考えたりすること」と、置き換えて取り組んでみるとよい。

さて、シーサーを調べてみると沖縄地方の伝説の獣であり、「魔除けの獅子」であった。その起源を調べてみると百獣の王ライオン。紀元前7世紀にオリエントを支配したアッシリア帝国の王は一千頭のライオンを退治したという伝説がある。ライオンは強さの象徴であり、その力は人々の



写真1 歴博のシーサー像

恐れや畏怖の的であった。いつしか最強のものを象徴するようになった。例えば、エジプトでは上半身が神格化したファラオ、下半身がライオンの守護神スフィンクス。古代オリエントのグリフィン(鷹(鷲)の上半身に翼つけ、スリランカでは剣をもたせ、シンガポール(獅子の国)では、ポセイドンとのハーフのような怪物、マーライオンを考え出した。獅子が最強の降魔除災の守護神として変容していく

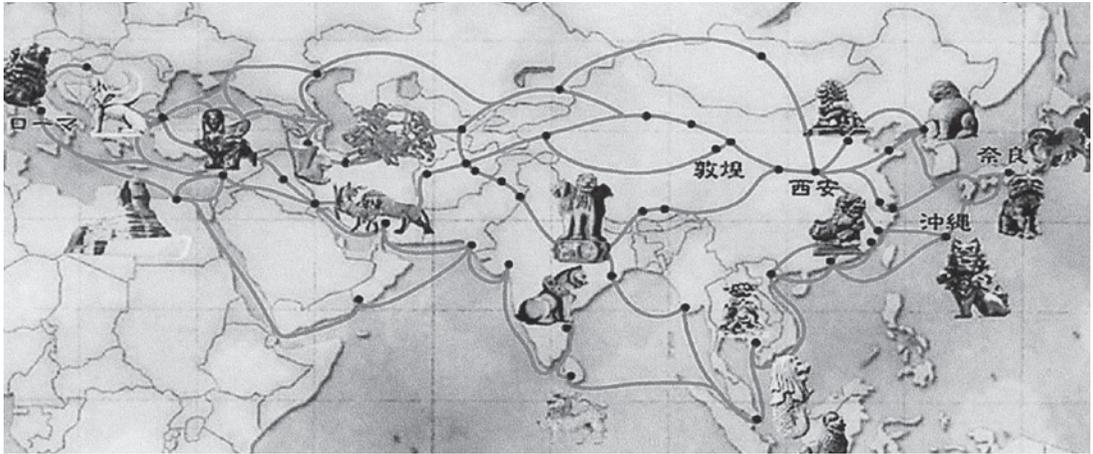


図2 シーサーロードの図

www.wonder-okinawa.jp/011/roots/world/rw01/rw01.html この図はシルクロードに各地の獅子像を貼り付けたもので、スフィンクス・グリフィン・マーライオン・麒麟・シーサー・狛犬と変容し、文化の伝播と変容がわかる。

ようすを垣間見ることができる。(図2)

民俗学の学習効果

はじめに高校生の宗教観を述べたが、学習後にどのような変化がおこるだろうか。学習を終えた生徒の論文を参考にしていきたい。

(日本の神々をテーマとした生徒の論文より)

はじめに神には4つの種類があると分類されるとしうえで、総括している。

1. 自然を主体とする神
2. 社会集団を主体とする神
3. 生活の特定の側面に関わって機能分化した神
4. 人間との連続性がある神

神の分類の1.自然を主体とした神は、人間の力ではどうすることも出来ない存在=カミ(神)という考えから始まったのであろう。自然は、災害と豊かさの両方を併せ持つ存在だ。自然に対する畏怖と感謝、尊敬から巨岩や山を祀ったことが信仰の始まりであり、神の誕生だと思う。そして社会ができるに従い、2→4.の神が登場、多様化していったのではないだろうか。

広大な自然に対する畏怖や尊敬は、現代人にも共通して残るところがあると思う。例えば神社に足を踏み入れたとき、「気」を感じたことが無いだろうか。私は毎年の初詣で神社を訪れるたび、何となく背筋が伸びる。また、幼い頃に母から、「トイレを綺麗にすると美しい子が産める」ということを聞いた。これは廁神の存在が語り継がれている証拠である。

このように、日常の習慣の中で、あるいは戒めと

しての教えのなかに、確実に神の存在を現代に残す。「神」についてここまで研究しレポートを書いたというのに、私は「神」の存在を、ここで否定する。なぜなら、私達(現代人)は、決して神の存在を畏れ生活しているわけではない。例えば、地震が起きたとき、我々はまず神の仕業(怒り)とは考えない。地震がプレートの動きや火山の活動のせいであることを知っている。しかし、古人がそれらを神の仕業と考えたのは、地震の原因を知らなかったからだ。

結論として、神は人間の畏れが生んだ想像上の「心の拠り所」である。人間は自然に対してはちっほけな存在であり、「心の拠り所」を求める弱い存在である。だから、神に縋ったり、頼ったりする気持ちが起こる。それ故、祈り、信仰が生まれるのだ。神があるところには人間の切な願いがあるように思う。それは豊作を願う気持ちや子孫繁栄を願う気持ちなど、時と場所によって様々な願いだ。だから、前言を撤回する。神の存在を、私は否定しない。

このような見解に達した生徒からは、自分の考えで意志決定する訓練が出来て、神や宗教に対しても、全く否定したり、その逆に、妄信的にカルト教団に参加したりすることはないだろう。

以上のように、民俗学の授業展開としては、課題を自ら検証させる調べ学習が有効であり、問題解決型学習に学習効果が認められた。

参考文献

- 小関勇次 「国立歴史民俗博物館授業実践協力校報告書」H18
 小関勇次(共著)「地理教育用語技能事典」帝国書院
 貝塚智紗 「日本人と神」千葉県立東葛飾高校2年生自由研究論文H19